平成２４年８月２５日（土）

来住廃寺３９次調査　現地説明会資料

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター
松山市教育委員会文化財課

調 査 地：松山市来住町８５０番地（史跡 久米官衙遺跡群 久米官衙遺跡・来住廃寺跡）
調査期間：平成２４年６月１日（金）～８月２９日（水）
調査面積：約１８９㎡

１．はじめに

松山市教育委員会文化財課と公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センターは、史跡久米官衙遺跡群 久米官衙遺跡・来住廃寺跡の整備活用公開に向けて、遺構の造営・存続年代や建物配置を把握するための資料を得る目的で、発掘調査をおこなっています。

来住廃寺の第３９次となる今年度の調査では、金堂北東部域における寺院に関連する建物の有無やその他の遺構の確認、伽藍配置の解明を目的に発掘調査を実施しました。

今回の調査区に隣接する第３５次（２０年度）、第３６次（２１年度）調査区で瓦廃棄土坑や区画施設が確認されていることから、関連する遺構の検出が期待されました。

２．来住廃寺について

来住廃寺に関しては、昭和４２年以降、断続的に発掘調査を実施してきました。その結果、来住廃寺は、７世紀の終わり頃に回廊状遺構が壊された後、その東側の一部と重複して創建されたと考えられています。僧坊とみられる建物が確認されているほかは、詳しい伽藍の様子は明らかではありませんが、現在も金堂基壇と、その上に残された露盤を見ることができます。

松山平野には８つの古代寺院の存在が確認されていますが、そのうち発掘調査が実施されているのが来住廃寺です。また『伊予国風土記』逸文には「久米寺」の記事が見えますが、８つの寺院のいずれを示しているのかは不明です。

３．確認された遺構・遺物

発掘調査では、弥生時代と古墳時代の竪穴建物や、中世・近世の溝などの遺構を確認しました。また来住廃寺に関連すると考えられる瓦が、まとまって出土しています。

【遺構】

竪穴建物　ＳＢ１　平面形が隅丸方形を呈し、周壁溝を持つ弥生時代の竪穴建物です。黄色土が混入した黒褐色土を用いて貼床を構築し、中央には大型の土坑（ＳＫ５）があります。ＳＢ１を覆うように黒色オリーブ土が厚く堆積し、布目瓦や格子叩き目、細縄叩き目をもつ瓦のほか礫（川原石）が集中して出土しました。

ＳＢ２　規模・平面形は判然としませんが、古墳時代後期に位置づけられる竪穴建物です。

溝　　ＳＤ１　調査区を南北に縦断する近世の大溝です。長隆寺に関連すると考えられる１８～１９世紀の瓦や陶磁器が大量に出土しました。またＳＤ１の溝の底には、後述するＳＤ２、ＳＤ３に併行する溝が存在していたようです。

ＳＤ２　調査区を南北に走り、途中で西側へほぼ直角に折れ曲がる溝です。溝底からは中世（１３～１４世紀）の土釜が出土したことから、この頃に掘削されたものと考えられます。

ＳＤ３　ＳＤ２と東西軸に線対称をなすように、調査区西側から南側へ直角に折れ曲がる溝です。ＳＤ２と同様、中世の土釜が出土しています。ＳＤ２、およびＳＤ１の底に存在していた溝と併せて、敷地の区画溝として通路の機能、ないしは土塀のような遺構が存在した可能性があります。

土　坑　　ＳＫ１　近世の土坑。大量の瓦を含み、基底部に短円筒形の石を置いています。

このほか、柱穴を 62 基検出していますが、現状では掘立柱建物等を構成する柱穴は確認されていません。

【遺物】

弥生土器　弥生時代前期から後期までの土器が出土しています。弥生時代前期・中期の土器は、周辺の調査からも確認されています。後期の土器のうち、ＳＢ１から出土した“ジョッキ型土器”と呼ばれる土器の底部は、この時期の中心的な集落と考えられる祝谷六丁場遺跡でも確認されていますが、出土例は少なく、珍しいものです。

瓦　調査では、大量の瓦が出土しました。その時期は古代から近世までの長期に及ぶものですが、古代の瓦は来住廃寺に、近世の瓦は長隆寺に関連するものと考えられます。古代の瓦には来住廃寺の創建期に位置づけられる単弁蓮華文軒丸瓦（たんべんれんげもんのきまる）や布目瓦のほか、廃絶期に近い平安時代の瓦など、多種多様な瓦があります。また近世の瓦も２～３つの段階に分けられるようです。

土師器　古墳時代から古代の甕や高坏のほか、１３世紀～１４世紀頃の調理具である土釜の破片などが出土しています。

４．調査の成果と課題

来住廃寺に関連する遺構を確認することはできませんでしたが、来住廃寺の創建から廃絶にいたる長期間にわたる瓦が出土しました。これらは来住廃寺の変遷や、金堂以外の建物の存在を探る資料となります。またＳＢ１上位で確認した黒色オリーブ土は、調査区東側を中心に広く存在しています。遺構としての認定は困難ですが、建物の廃絶、あるいは整地に関連するものである可能性があり、今後の検討課題です。

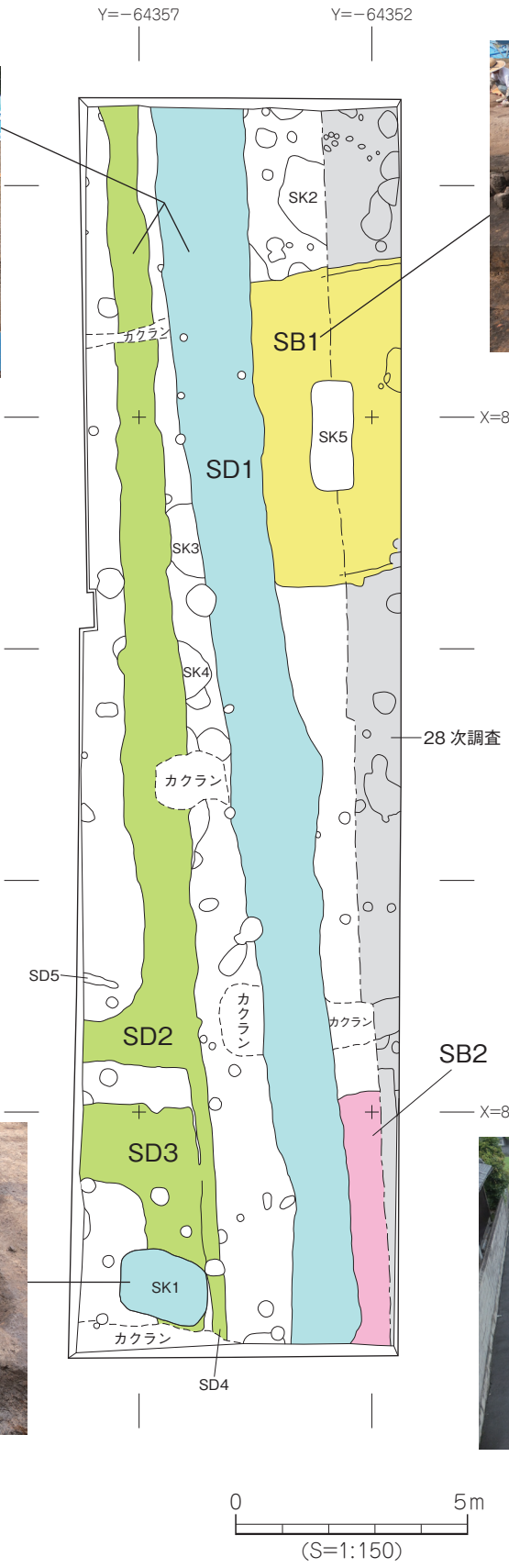
このほか、中世の来住台地には岸城が築かれたと言われるものの、その位置などは明らかになっていません。今回確認した中世の溝は、岸城に近接する時期の遺構である可能性があり、重要な資料を提供することができました。

ＳＤ２、およびＳＤ１掘削状況

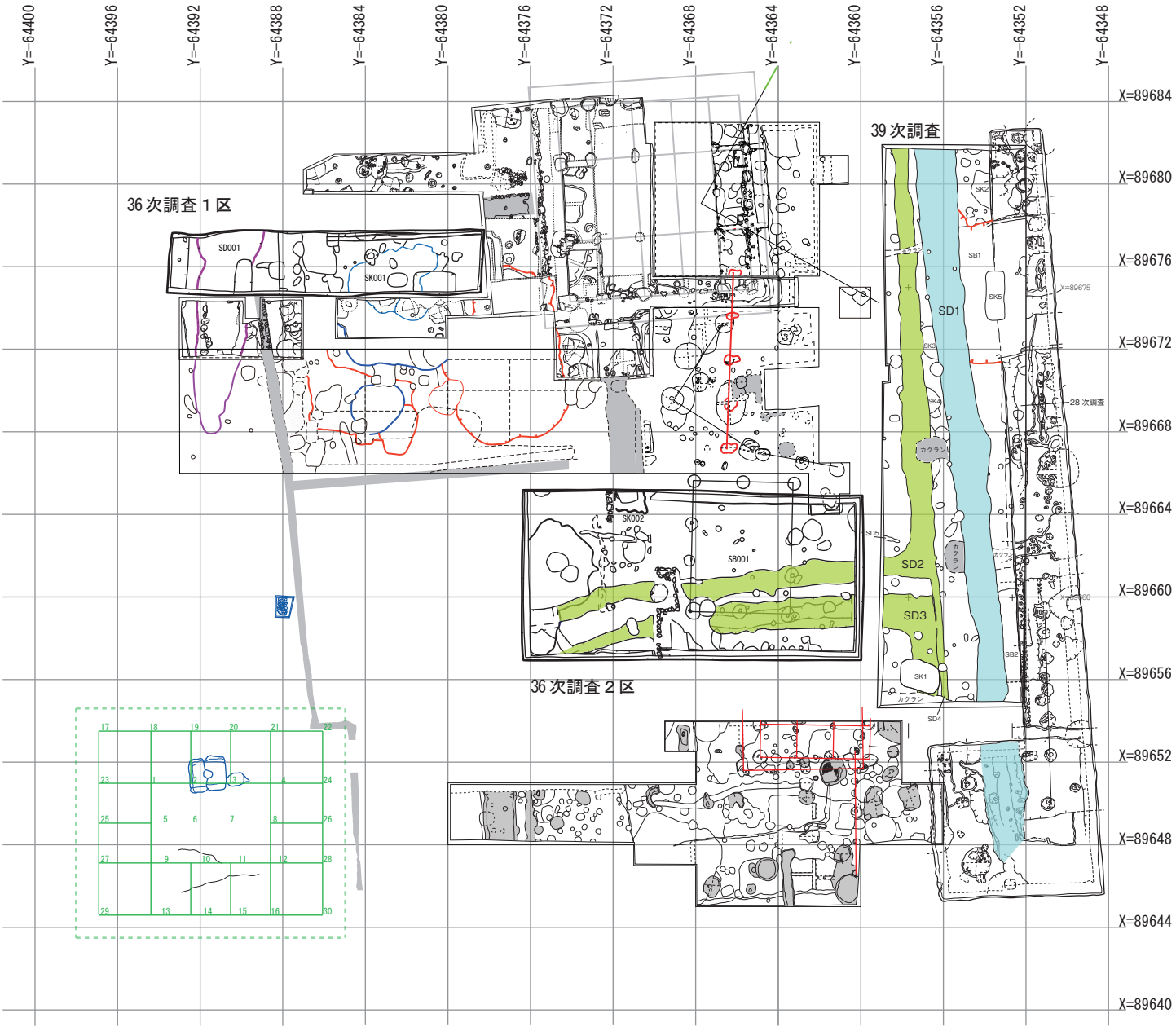
ＳＢ１上位 瓦出土状況

ＳＫ１断ち割り状況

遺構検出状況（北東から）



来住廃寺 39 次調査遺構配置図



来住廃寺金堂北東調査区位置図(S=1:300)